

当たり前のこととして学んできた彼女にとっては、学級の仲間の関わりは理解しがたいものがあったといえる。学級の中での人間関係で「なぜ」や「どうして」という疑問にお互いが答え合い、理解し合うための技能としてアサーションの概念を共通に理解し、人間関係を結んでいくことは大切なことである。その後、勤務校を異動した後も、自己表現の苦手な子どもや攻撃的な表現パターンを繰り返す子どもと接する中で「さわやかに自己表現をする」ことがいかによりよい人間関係を築くために役立つかをアサーショントレーニングを介して伝え続けている。

「総合的な学習」にアサーショントレーニングを取り入れる

高橋均

新教育指導要領の目玉として、小・中・高に共通して「総合的な学習の時間」が設けられることになった。本校では20年以上前から「総合的な学習」に取り組んでいるが、新指導要領でいう「総合」とは意味が少し異なっていることをおことわりしておきたい。新指導要領ではいくつかの教科の合併であったり、クロスカリキュラムであったり、選択学習であったりというイメージが強い。本校で考える「総合学習」は合科をすることではなく、子ども達一人一人の体験や学習が自分の中で総合化され、内面化されて一つの人格を形成していく「内的総合化」を目指す学習をしている。今の子どもたちを見ると、中等教育の自我の確立期にあつて、各個人が各個人としての「内的総合化」をうまく進められなくなっている。その結果として子ども達同士がうまく関係を作れなくなっている。社会生活・家庭生活の見直しが根本であろうが、学校教育では直面する現実の子ども達への対処として、「内的総合化」を促す指導が必要である。昨年度から「総合学習」の一連のプログラムの中にアサーショントレーニングを絡ませた学習を取り入れ、ピアサポートへの環境づくりを試みた。ここではその実践を報告する。

教師支援プログラムとしてのアサーショントレーニング

沢崎俊之

筆者はここ数年、教員やスクールカウンセラー対象の講演会や研修会の一部でアサーションの考え方を紹介したり、また校内研修会で教職員や保護者対象のアサーショントレーニングのトレーナーをつとめたりしてきている。アサーションは子どものためだけでなく、教師自身が自分との付き合い方、子どもとや保護者との付き合い方、職場の同僚や上司との付き合い方を考える際の手掛かりを提供すると考えられる。つまり、アサーションは自分自身が燃え尽きないためや、まわりに迷惑をかけないためにも役立つ可能性があるということである。本シンポジウムでは、教員対象のアサーションの研修会・ワークショップのあり方、ねらい、留意していることなどを中心に話題を提供したい。また、今年の8月に埼玉大学の公開講座として「教師のためのアサーショントレーニング入門」(3日間)を実施する予定なので、当日はそのことにもふれる予定である。

アサーションという視点からいじめ・不登校などをとらえる

園田雅代

いじめ・不登校・暴力・学級崩壊といった現象は、種々の複合的要因が相乗的・循環的に働いて生じることが多く、単一の犯人探しには益がない。解決に向けての即効薬やマニュアルもない。アサーションについても、これを導入しさえすればいじめなどが解決もしくは予防できるとは言いがたい。が、①学校という場でのキーパーソンである教師が、例えば自分のできること・できないことは何かを判断し、他者に協力を求めようと自分から現状や心情を開示したり、連携を作り出すべく働きかけてゆくこと、②各人の違いを認め合い、かつ子ども同士の、また教師・子ども間の直面化・対峙も内包する学級・学校風土を經常的に育てること、こういったことへ実践的取り組み・思想的裏付けの可能性がアサーションにはあるように思う。いじめ・不登校などをアサーションという視座からとらえるとどんなことがおさえられるか、また教師がこういった現象に取り組む上でどんな助けになりうるか、一方で留意すべき諸点は何か、当日は具体例を盛り込みながら論じたい。